戒　法　門

寛元元年　　二二歳

夫人は天地の精、五行の端なり。故に悟りあて直きを人と云ふ。心に因果の道理を弁へて人間には生まれける由を知るべし。一代聖教のおきてには、戒を持ちて人間には生まるとおきてたり。

戒と申すは一切の経論に説かるゝ数は、五戒・八戒・十戒・十重禁戒・四十八軽戒・二百五十戒・五百戒乃至八万四千戒。此くの如く戒品多しといへども、始めの五戒を戒の本と申し候ぞ。五戒と申すは、一には慈悲を起こして物の命を殺さゞる戒を不殺生戒と名づく。道理なき殺生を制するなり。一を殺して万を生かすべきをば許すべし。二には盗みせざる戒を不偸盗戒と名づく。道理なき盗みの事なり。三には他人の妻を犯さゞる戒を不邪淫戒と名づく。四には妄語せざる戒を不妄語戒と名づく。由なき事に妄語せざれとなり。五には酒を飲まざる戒、僻事を制するなり。薬酒をば飲むべし。先世に三宝の御前にして此の戒を受けし時、天には日月・衆星・二十八宿・七星・九曜・五星、地には五つの地神・七鬼神・十二神・三十六禽、又梵天・帝釈・四大天王・五道の冥官等、此の五戒を受くる人を護らんと誓ひ給ひき。

又五戒に依って生ずべき処を定む。不妄語戒は大地をつくる。不殺生戒は草木となる。不邪淫戒は大海・江河となる。不盗戒は風となる。不飲酒戒は火となりて草木の中にあり。又五戒は五山となる。南には火の山、北には雪の山、東には木の山、西には金の山、中には土の山なり。空の雲も五戒なり。青き雲は不殺生戒となる。白き雲は不盗戒となる。黒き雲は不邪淫戒なり。黄なる雲は不妄語戒なり。赤き雲は不飲酒戒なり。雨空より降るに又五つの味あり。すき味の雨降りては、青き花一切すき菓をいだす。からき味の雨は白き花一切のからき菓をいだす。しわはゆき味の雨降りては、黒き花一切のしわはゆき菓をいだす。あまき味の雨降りては、黄なる花一切のあまき菓をいだす。苦き味の雨降りては、赤き花一切のにがき味の菓をいだす。又春七十二日は東、不殺生戒。夏七十二日は南、不飲酒戒。秋七十二日は西、不盗戒。冬七十二日は北、不邪淫戒なり。四季の末の土用七十二日は中央、不妄語戒なり。又天地父母となりまします。父母交懐の時、父の淫は白く母の淫は赤し。赤白の二滴もろともに五戒より生ず。父母の精血下りて、父の淫は骨となり、母の淫は肉となる。二つの足、二つの手、一つの頭、是も五戒より出でたり。又子の腹の中に肝の臓と云ふ物あり。七葉にして色青し。母のすき物を願ひし時出で来たる物なり。其の中に魂と云ふ神あり。眼に出でて物を見る。東方の空に歳星と申す星あり。不殺生戒の人を護らんと誓ひし故に子の神となる。又母のからき物を願ひし時、子の腹に肺の臓と云ふ物出で来て、其の色白く其の形八葉にして

蓮華なり。其の内に魄(はく)と云ふたましひ(神)有りて鼻に出でて物をかぐ。西の空に太白星と云ふ星あり。不盗戒の人を護らんと誓ひし故なり。又母のにがき物を願ひしかば、子の腹に心の臓と云ふ物出で来て、其の色赤く、其の形鶏(とり)の卵(かいこ)をさかさまに立てたるが如し。其の内に神(しん)と云ふたましひ有りて、舌に出でて物を味はふ。南の空に熒惑星(けいこくせい)と云ふ星あり、不飲酒戒の人を護らんと誓ひし故なり。又母のしわはゆき物を願ふに依って、子の腹に腎の臓と云ふ物出で来て、其の色黒く其の形半月なり。其の内に志と云ふたましひ有りて、耳に出でて物を聞く。北の空に辰星(しんせい)と云ふ星あり、不邪淫戒の人を護らんと誓ひし故なり。又母の甘き物を願ひし時、子の腹に脾(ひ)の臓と云ふ物出で来て、其の色黄にして其の形一葉四角なり。内に意と云ふたましひあり。四身に遍してあつき(熱)ぬる(温)きをしる。先世に不妄語戒を持ちし時、中央に鎮星(ちんせい)と云ふ星あり、此の不妄語戒の人を護らんと誓ひし故なり。

殊には不妄語戒を委(くわ)しく申すべし。妙楽大師提謂経(だいいきょう)を引いて云はく「不妄語戒は四時の如し。土は中央に主たり。中央は脾に主たり。脾の臓は身と土となり。四季に主たり。不妄語戒も四季に遍す。身には五根に遍す」と。五戒を破る中に不妄語戒を破るは罪深き戒にて候。其の故は世間の人妄語し候へば、冬は夏になり、春は秋になり候。故に冬温かにして草木出生して花さき菓ならず。夏はさむくて物そだたず。春・秋も此を以て知るべし。当時の世間是体(これてい)に候はずや。態(わざ)と妄語をさせて世の中を損じさし、人をも悪道に堕とさん料(りょう)に、天狗外道平形(ひらがた)の念珠を作り出だして、一遍の念仏に十の珠数(たま)を超(く)りたり。乃至一万遍をば十万遍と申す。是念珠の薄く平(ひら)たき故なり。是も只申すにあらず。念珠を超(く)るに平数珠を禁めたる事諸経に多く候。繁き故に但一・二の経を挙ぐ。数珠経に云はく「応に母珠を越ゆべからず、過(とが)諸罪に越ゆ。数珠は仏の如くせよ」と。勢至菩薩経に云はく「平形の念珠を以(もち)ふる者は此は是外道の弟子なり、我が弟子に非ず。我が遺弟(ゆいてい)は必ず円形の念珠を用ゆべし。次第を超越する者は因果妄語の罪に依って当に地獄に堕すべし」云云。此等の文意を能く能く信ずべし。平たき念珠を持ちて虚事をすれば、三千大千世界の人の食を奪ふ罪なり。其の故は世間の人虚事をする故に、春夏秋冬たがひて世間の飢渇(けかち)是より起こり、人の病これより起こる。是偏(ひとえ)に妄語より始まれるなり。かう申すとも、此の世の中の人は心なをる(治)まじく候へども、又心有らん人はさては僻事(ひがごと)にこそ有るなれと知らしめんが為に経文を挙げ候。又世間の念仏者、現(げ)に夢に智者見えたりけるなんど申し候ぞ。天狗の見せたる夢なり。只道理と経文とを本とすべし。又木・火・土・金・水も五戒なり。木をば曲直と云って、まがれるもあり、なおきもあり、少陽(しょうよう)とかたどれるなり、故に春生ず。火をば炎上と申して空へのぼる、ものを熱するなり。五穀の火にあひて飯(いい)となるが如し。太陽とかたどれる故に、極めてあたゝかなり。土と云ふ物は社稷(しゃしょく)と云って、万(よろず)の物をわかし出(涌)だすなり。是又少陽なり。金(かね)

は禁めとなる。是少陰(しょういん)の物なるが故にかたし。物のおこりを禁むるなり。水をば潤下(じゅんか)と云って、物をうる(潤)をし、やし(養)なふなり。陰の終(つい)にはとく(融)る故に水なり。又五行の相生(そうしょう)と云ふ事あり。木より火生じ、火より土生じ、土より金生じ、金より水生ず。是は常の人のしるところなり。又水は太陰(たいいん)の物にして、くらかるべき物なり。何の意ぞ、水の底あ(明)かきや。木は少陽の物なれば少しあか(明)ゝるべし、何の意ぞ、木の中くら(暗)きや。火は太陽の物なれば大いにあかゝるべし、何の意ぞ、火の中暗きや。土は少陽の物、少しあたゝかなるべし、何の意ぞ、ひゆるや。金は少陰の物、少しくらかるべし、何の意ぞ、すこしあかきや。此等は智者の知るところなり、繁き故に注せず。又五行の相剋(そうこく)と云ふ事あり。木の敵(かたき)は金なり。金は勝ち、木は負くる故なり。春と秋とは敵対の季、東と西とは敵対の方なり。火の敵は水なり。水は勝ち、火は負くる故なり。夏と冬とは敵対の季、南と北とは敵対の方なり。土の敵は木、木は勝ち、土は負くる故なり。木と金と合ふて金のか(勝)つ事は、堅きと和らかなるとの故なり。火と水と合ふて火の水の負くる事は、あた(暖)ゝかなるとつめ(冷)たきとの故なり。土と木と合ふて木に土の負くる事は、多と一との故なり。土は的の如し。木の土をとを(徹)る時、土五つにわれ、木は箭(や)の如くしてとを(徹)るなり。

我等が眼は木より生ず。耳は水より生ず。鼻は金より生ず。舌は火より生ず。身は土より生ずるなり。上の五行をもて五根の損ずるを知って、病の有(あ)り様(さま)を知るべし。又五根の損ずるは、五戒の破るゝ故なり。させる虚事(そらごと)をせぬ人も、あまりにすき物を好めば、舌損じ身に瘡(かさ)多し。させる物をば殺さねども、辛き物を多く食すれば眼(まなこ)損ず。是を以て余の戒をも知るべし。人目には五戒を持ちて貴き様なれども、食物に五戒を破りて三悪道の主となり、人には善を疑はせ、我は仏法を恨む。此の比(ごろ)の世間の人、大旨(おおむね)是に似たり。戒を習はんと思はん者、能く能く我が身を知るべきなり。

春七十二日は木勝つ故に、我が身に瘡出でて身かゆ(痒)し。夏七十二日は火勝つ故に、我が身熱して汗たる。秋七十二日は風勝つ故に、我が身すさ(凄)まじく秋風に身損ず。冬七十二日は水勝つ故に、我が身寒くつめ(冷)たし。四季の土用には土勝つ故に、我が身ふとる。又我が身の肉は土、骨の汁は水、血は火、皮は風、筋毛(すじけ)は木なり。又臍(へそ)より下は土、臍より上(うえ)胸さきまでは水、胸さきより上喉までは火、喉より口までは風と金となり、口より上頂(いただき)までは木と空となり、是も五戒なるべし。又三千世界も五戒を以て作れるなり。火と空とは我が頭と腰となり、大海は腹なり。春と夏とは脇なり、秋と冬とは背なり。大骨の十二は十二月なり、小骨の三百六十は三百六十日なり。口の気(いき)は空の風なり、鼻の気は谷の風なり、身の毛孔の風は家の風なり。右の眼は月、左の眼は日なり。髪は星なり、眉は北斗なり。血脈は江河なり、骨は玉石なり、身の毛は草木なり。我が身より一切の人間、乃至依報の国土まで五戒を以て作れるなり。故に世間に物を殺す事多けれ

ば、東の木、星と変じて彗星と成りて空に出づ。此の時春の草木おひとゞまる。又此の星人間に下りて、人の眼より入って眼の病となる。世間に偽り多ければ、中央の土、星と変じて彗星と成りて空に出づ。此の時大地やせて石となる故に草木おひず。又此の星下りて人の口を病ましむ。世間に盗人多ければ、西の金、星と変じて彗星と成りて、空に出づる時秋の菓すくなし。又此の星下りて人の鼻に入りて病となり、戦あて世の乱れとなる。世間に酒をのむ者多ければ、南の火、星と変じて彗星と成りて空に出づ。此の時旱魃有りて草木かるゝ。又此の星人身の内に入りて疫病世に多し。世間に邪淫多ければ、北の水、星と変じて彗星と成りて空に出づる時、大水世間に行き、此の星人の耳より入りて身のひゆる病となれり。五戒破れて世間の五穀損ずれば、身の五臓もよはく成り、五神も栖を失ふ。此の故に五つの鬼神身に入って人の心を誑かすなり。日月の光も失せて天地の禍ひとなり、後生には五戒の大地破るゝ故に三悪道を栖とす。臨終には顚倒して只此の事にあえり。上の五戒は名目は提謂経に出でたりといへども、意は止観・真言の道理を以て書けるなり。善導の釈にも仁・義・礼・智・信、地・水・火・風・空の名計りは挙げたりといへども、其の義理なし。又浄土宗の学者も知ることあたはず。是体に知らずと云ふとも、浄土に生まれなんや。暫く小善成仏と申すは是体に候なり。浄土宗の学者、伝教大師の釈を引けども、末法には持戒の者なしと云ふ釈の意を知らずして、人々を迷はす法門なり。恐るべし恐るべし。

次に定の法門の事。夫定と申すは多くの定ありといへども、先づ出入の気を知るべし。静かなる処に居して、左の足を右の股にかけ、右の足を左の股にかけ、左右の手を合はせてこぶしをにぎれ。大指をにぎりこめよ。口を合はせて鼻より気を入れ、口より気を出だせ。口の気はあたゝかにかろし。火と風との故なり。鼻の気はおもくつめたし。土と金との故なり。出入の気は諍はずして出だし入れよ。出入の気さはがしくば、我が身に病有りと知るべし。譬へば煙の清濁を見て薪の生乾を知るが如し。

春	仁　慈を以て義と為す 肝　不殺生戒	眼木青酸木の山雨の味酢し。歳星東に出づ。眼の病あり。
夏	信　乱れざるを本と為す 心　不飲酒戒	舌火赤苦火の山雨の味苦し。熒惑星南に出づ。舌の病あり。
土用	智　偽らざるを義と為す 脾　不妄語戒	身意土黄甘土の山雨の味甘し。鎮星中に出づ。身の病あり。
秋	義　理を以て義と為す 肺　不偸盗戒	鼻金白辛金の山雨の味辛し。太白星西に出づ。鼻の病あり。
冬	礼　敬ふを以て本と為す 腎　不邪淫戒	耳水黒鹹雪の山雨の味鹹し。辰星北に出ず。耳の病あり。

木より火生じ、火より土生じ、土より金生じ、金より水生ず。木の敵は金、金の敵は火、火の敵は水、水の敵は土、土の敵は木なり。

土	水	火	金	木	五行なり
地	水	火	風	空	五大なり
黄	黒	赤	白	青	五色なり
意	耳	舌	鼻	眼	五根なり
□	○	△	◡	⌓	五輪なり

雨の五味の次第の事。東方の雨はす(酢)し。不殺生戒、青・眼・春・草木。南方の雨は苦し。不飲酒戒、赤・舌・夏・火。中央の雨は甘し。不妄語戒、黄・意・土用・大地。西方の雨は辛し。不偸盗戒、白・鼻・秋・風・金。北方の雨は鹹し。不邪淫戒、黒・耳・冬・大海・江河。

五山は即ち五戒なる事。東は木の山、不殺生戒。南は火の山、不飲酒戒。中央は土の山、不妄語戒。西は金の山、不偸盗戒。北は雪の山、不邪淫戒なり。

五常は即ち五戒なる事。仁と云ふは人を憐れみ、生を慈しみ、物を育くむ心なり。義と云ふは事の謂れを違へず、邪(よこしま)なる事をなさず、万事に理を失はざる是なり。礼と云ふは父を敬ひ、母を敬ひ、天道仏神を貴び、ない(蔑)がしろにせざるを云ふなり。智と云ふは事の有り様をよく知りて、善事悪事を弁へ、作すまじき事をなさず、作すべき事をなす是なり。信と云ふは事に於て誠を致し、僻事(ひがごと)をなさず、心の底に思ひ解くる是なり。又仁は不殺生戒、物を憐れむ故に物の命を断たざるなり。義は不偸盗戒、万の理を失はざる故に、人の物を主(あるじ)に知らせずして我が物とせず、又押しても取らざるなり。礼は不邪淫戒、淫必ず礼を破る。愛心あればさる(左有)まじき人なれども、邪なる振る舞ひをなす。是を守れば上下濫(みだ)れず、行法もた(正)ゞしきなり。智は不妄語戒、物の有り様を知りぬれば妄語せず。信は不飲酒戒、心狂乱せず、即ち信あるなり。酒は人の心を乱す故なり。

私に云はく、此の五戒は仏いまだ出世し給はざる時は、外道等も之を持(たも)ちて、天上に生ずと教ふるなり。但し持犯計りを沙汰(さた)して、其の上に仏法を聞かんことをば知らざるなり。仏世に出で給ひて此の五戒を持ちて人身を受けて、其の上に仏法を聞きて悟りを開くと説き給ふなり。然れば此の五戒に様々の功徳を備へて、戒として摂せずと云ふことなしと説き給ふ。此の五戒を根本として大乗の諸戒も具足するなり。故に此の五戒をば具足根本業清浄戒(ぐそくこんぽんごうしょうじょうかい)と名づくるなり。此の五戒若(も)し破れつれば一切の諸戒皆破る。五戒は破るといへども、大乗戒は持ちたりと云ふ事は之無し。根本戒と名づくるは此の故なり。三乗の賢聖も、大小倶に此の戒を持つ故なり。仏も此の戒を持ち給ひて、人中には出で給ふなり。若し此の戒なくば、浄飯(じょうぼん)王宮に生まれて菩薩と云はれて、六年苦行(くぎょう)

して仏となり、大丈夫の身と云はれ給ふ事有るまじ。一切衆生も五戒に依らずと云ふことなし。魚に五つのひれあり、是即ち五戒の体なり。馬に四支有りて又一頭あり、是五戒なり。之に準じて一切衆生を知んぬべし。三悪道の衆生も知んぬ、五戒の体なりと云ふことを。戒は破るれども戒体は失せずと云ふことをば、是を以て意得べき事なり。破戒と失戒とのかはりめをば、此等にて思ひ合はすべし云云。倩事の情を案ずるに、山川・渓谷・大海・江河・土地・草木一切何物か五戒の体に非ずと云ふことなし。委しくは提謂経を見るべし。地獄の衆生も五戒を持つ、餓鬼の衆生も五戒を持つ乃至云云。地獄等の衆生の持つ所の不殺生戒も、仏・菩薩の持つ所の不殺生戒も、但不殺生戒は同じことなり。但し所持の法はかはりめなけれども、能持の人には差別あり。故に沈浮も有るなり。然れども戒体に於ては只何れも一なり。爰を以て一業とは云ふなり。是体の謂れをば、法華経ならではえいはぬ事なり。法華経の開会の法門と申すは、此の五戒を開会するなり。経文委しく見るべし云云。

鶏が子をはごくみ、烏が子をかなしむまでも皆五戒の謂れなり。五戒と云ふは仏因なり。然ればかゝる畜生までも仏法を行ずるにて侍るなり。慧遠法師が螻蟻をも超えずと云ひけん事も理なり。畜生云云、修羅云云、天云云、声聞云云、縁覚云云、菩薩云云、仏云云、天竺の人云云、唐土の人云云、日本の人云云。文に云はく「他我に色を恵む、与へざれば取らず。此の色の上に於て仁・譲・貞・信・明等の五戒・十善を起こさば人天の四運なり」と。余色と云ふは九界の身なり。余塵と云ふは九界の財物資生の具なり。余界と云ふは九界なり。「他我に色を恵む、与へざれば取らず」と云ふは人界の事なり。是則ち五戒なり。提謂経に云はく「五戒は天地の根本、衆霊の源なり。天之を持って陰陽を和し、地之を持って万物を生ず。万物の母・万神の父、大道の元、泥洹の本なり」と。

蓮　長